

ロバート・マクナマラ氏の死去に思う

7月6日アメリカ東部時間の早朝、1960年代にアメリカの国防長官を7年間にわたって務めたロバート・マクナマラ氏

(Robert S. McNamara) が93歳で亡くなりました。午前5時半ごろ、同氏が死去していることに夫人が気付いたようです。このところ健康が優れなかったようですが、入院することもなく、自宅で亡くなったこと、つまり「畳の上で死ねた」ことに、私は一種の感慨を覚えました。

マクナマラの死去に関して、7月7日付けのアメリカの新聞各紙は同氏の事績とその評価について長文の記事を掲載し、多くの評論家もそれぞれの視点からの論説を寄稿しました。それらは大同小異で、国防長官としてのマクナマラがベトナム戦争に果たした役割について述べ、1990年代半ばに発表された著書や2003年に行われたインタビューにおいて、マクナマラが述べたベトナム戦争あるいは戦争全般に対する見解と彼がベトナム戦争で果たした役割との間の大きな乖離について論じています。7月8日の朝日新聞の「天声人語」にも同様の趣旨の論説が掲載されました。

マクナマラという人物の経歴と事績、時の経過とともに変わったように見える意見を跡付けることは、私にとって決して無意味なことではありません。それは、私自身が生きてきた時代のなかで起きたことの裏で、キー・ポジションにあった人がどのように考えて行動していたのかを知ることなのです。

ロバート・マクナマラは、McNamara という姓が示しているようにアイルランドからの移民の子孫で（この点ではケネディー族と同じ）、1916年にサンフランシスコで生まれました。カリフォルニア大学バークレー校で経済学と哲学を学んだ後、ハーヴァード大学ビジネススクールに進み、暫く企業に勤めた後、1940年に経済統計学の専門家としてハーヴァード大学の教員 (assistant professor) になりました。第2次世界大戦に従軍し(終戦時の階級は陸軍中佐)、そこでも統計処理の専門家として働き、日本本土への空襲計画の策定にも深く関わったようです。彼自身が後年そのことを認めており、東京の空襲では10万人の住民を殺し、全体としては90万人の日本人非戦闘員の殺戮に関与したので、アメリカが負けていれば、自分は戦争犯罪人に指定されただろうと述べています。これは、自分が関わった冷酷な措置を率直に語って、自分自身の責任も十分認めたもので、マクナマラという人の性格の一面を物語っています。彼は、戦争の勝敗とモラルとの間の相関に疑問を持っていたようです。おそらく、戦争犯罪を裁いた東京裁判等に批判的な意見を持っていたのではないのでしょうか。

マクナマラは、第2次大戦の終結後ハーヴァード大学に戻りましたが、夫妻ともどもポリオに罹り（成人には珍しいことですが）、とくに夫人は長期の入院が必要で、多額の入院費を支払わなければならなくなりました。その入院費を支払うために、ハーヴァード大学を辞めて、給料の良いフォ

ード社に就職しました。その後、マクナマラは、創業者の2代目で社長だったヘンリー・フォード2世に引き立てられ、とんとん拍子で出世し、1960年には44歳で社長に就任しました。この年の11月に大統領選挙があり、ジョン・ケネディが当選し、1961年1月からケネディ政権が発足しました。

大統領に就任することが決まったケネディは、国防長官にマクナマラを抜擢することとしました。はじめマクナマラはその任にあらず (I'm not qualified) として断ったようですが、結局断りきれずに、1961年1月ペンタゴンに入りました。フォードの社長は僅か10週間務めただけでした。彼は、髪を毛をぴったりと撫でつけて、頭の真中できちんと分け、縁なしの眼鏡をかけ、アタッシュケースを手にして、颯爽と飛び回っていました。その姿は当時のビジネス・エグゼクティブの典型であり、アメリカの名門大学を卒業したエリートを代表するものでした。ケネディ政権には、ハーヴァード大学出身のケネディ自身をはじめ、名門大学出身者が集まっていました。ピューリッツァー賞受賞者のデイヴィッド・ハルバースタムは、彼らを “The Best and the Brightest” で描きだしました。私は、この本を拾い読みしたことがあります。きちんと読み直してみたいと思っています。

国防長官としてのマクナマラとベトナム戦争とは切っても切れない関係になりました。私も、多くの人たちと同様に、マクナマラといえばベトナム戦争を思い出します。ベトナム戦争はマクナマラの戦争だとまで言われても、マクナマラ自身が否定しなかったのです。彼はコンピューターによる冷徹な計算に基づいて戦争を遂行しました。

ケネディ大統領が1963年11月22日に暗殺されたあと、副大統領だったリンドン・ジョンソンが大統領に就任しましたが、このとき、マクナマラは辞任を申し出たそうです。しかし、ジョンソンはマクナマラを留任させました。そのころ、ジョンソンはベトナム戦争についてはマクナマラに任せ

きりだったようです。その関係はのちに変わります。

国防長官に就任した当初、マクナマラはベトナム戦争を3年から4年ぐらいで終わらせることができると思っていたようです。しかし、そうは行きませんでした。1964年の後半から北爆が始まり、戦争は拡大します。しかし、兵力の増強と大規模爆撃などをいくらしても、南ベトナムにおける北ベトナムとベトコンの勢力拡大をくい止めることはできなかったのです。戦況を好転させることが不可能なことに、マクナマラは1966年半ばには気づいており、戦争を終わらせる方策を模索し始めます。1966年9月、彼はジョンソン大統領に北爆の中止と兵力増強に歯止めをかけることを提案しますが、ジョンソンは受け入れません。そして、両者の間に溝が生じます。1967年4月マクナマラはジョンソンに戦争を止めることを提案する長い書簡を送ります。それによって両者の対立は決定的なものとなり、1967年11月ジョンソンはマクナマラを解任することを決意し、マクナマラは1968年1月にペンタゴンを去りました。ベトナム戦争に勝てず、それを終わらせることもできなかったという悔しさとともに去ったのです。国防長官だったディーン・ラスクが開いた歓送の昼食会で、マクナマラは泣いたと言われています。

私は、1965年8月から1年間、ミシガン大学に博士研究員として滞在しました。上記のように、この期間にベトナム戦争は拡大し、泥沼化し始めました。私にもそのことは十分分かっていました。アメリカの多くの若者がベトナムで死んでいくなかで、アメリカの大学の良い研究環境で、自分がかのうのと研究していることに後ろめたさを感じなかったわけではありません。しかし、当時のアメリカには、ベトナムなど取るに足らないことだとしか感じていない一面もありました。

1966年1月、ジョンソン大統領は恒例の年頭一般教書 (The State of the Union

Message ; 私はこの時はじめてアメリカでは自国のことを Union と呼ぶことがあることを知りました) で、ベトナムからは絶対に手を引かないと強調しました。私はその演説をテレビで見たことをはっきりと記憶しています。しかし、その年の9月から、ジョンソンとマクナマラとの間に亀裂が入り始めたのです。そんなことは知らずに、私は1966年9月アメリカを去ってイタリアのミラノ工科大学に移りました。

ベトナム戦争はアメリカの社会に深い傷跡を残しました。アメリカは、ベトナム戦争の終結までに約50万人の兵力をベトナムに送り、そのうち約5万8千人が戦死しました。ワシントンには、戦死者の名前を刻んだ碑があります。場所はリンカーン・メモリアルの近くで、私はそこを訪れたことがあります。ベトナム戦争でベトナム人が何人死んだのか、私は知りませんが、おそらく百万人ではきかないでしょう。アメリカ人とベトナム人の死者の声は、マクナマラのトラウマになったことでしょう。

マクナマラは、国防長官を辞めたあと世界銀行総裁に就任し、13年間在職して、65歳で退職しました。世銀での彼の業績は取り立ててどうということはありません。

世銀総裁を退職した後のマクナマラについては、詳しいことは分かりませんが、彼がもう一度マスコミに大きく取り上げられたことがあります。それは、彼が1995年に “In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam” という回顧本を出版したときです。この本で、マクナマラはベトナム戦争とそれについて彼自身が果たした役割を否定的に書いたようです。私は読んでいないので、何も言えませんが、この本に対する一般の評価は非常に厳しいもので、マクナマラは強い非難にさらされました。マクナマラはベトナム戦争で失敗した人 (loser) で、アメリカは loser に厳しいところなのです。マクナマラは loser という汚名をそそぐことができず、却って傷を負ったのです。

マクナマラはイラク戦争に批判的で、2003年に収録された記録映画 “The Fog of War” で、ベトナム戦争での経験がイラク戦争で生かされていないことを指摘して、「戦争というものは非常に複雑なもので、人間の把握する能力を超える。我々の判断、理解は十分なものではない。そのなかで、我々は不必要に人々を殺すことになる。」と述べました。The best and the brightest のマクナマラが到達した結論は意外に常識的なものでした。(おわり)